

北九州市内のホームレスは今年、六十二名になりました。最も多かった平成十六年の四百三十四名に比べると、大幅に減少しています。その一翼を担っているのが、認定NPO法人「抱樸」の活動です。

「抱樸」では、ホームレスのための炊き出し、物資の提供などとともに、就労先やアパートの紹介などの自立支援を行っています。理事長の奥田知志さんは「ホームレスの支援活動をしていると、『ホームレスは自己責任だ。放っておけ』という声を聞くことがある。でもね、『おんなじいのち』なんだよ。まず、住む所と食事が必要なんだ。」と言います。

しかし、奥田さんは住む所や食事を用意しても、それだけではホームレスは自立できないと気付いたそうです。

「家族や友人、所属する企業もない、社会的な孤立と困窮の中にいるのがホームレスと分かった。だから、僕たちは物を与えるだけでなく、周りの人との関わりをつくる努力を続けるんです。」

奥田さんたちは炊き出しで出会ったホームレスに寄り添い、見守って、職を探したり、場合によっては最期の着取りまで行っています。

ある男性は八十年あまりの人生のうち、五十年以上を刑務所で暮らしたそうです。刑務所を出ても、帰る家も家族もない彼は、刑務所に戻るために放火を繰り返していました。奥田さんた

ちが数年に渡って、友達づくりや、近所づきあいなどに協力した結果、彼は今、アパートで平穩に暮らしています。奥田さんは「やっと彼もホームレス卒業です」とうれしそうに話してくれました。

奥田さんたちの活動によって、三十年間で約三千百人がホームレスを卒業し、その六割は仕事を持つ就労自立を果たしたそうです。

「人は一人では生きられない、弱いんです。それなのに、現代は人と関わらない、迷惑もかけないのが良いとされます。だから、困ったときに『助けて』と言えない、孤独で社会的に孤立した人が増えているのではないのでしょうか」と奥田さん。

人とのきずなを大切にして、お互い思いやりをもって助けあう社会でありたいですね。  
では、また。

